



研究ノート

ウズベキスタンにおける

イスラーム期文献史料の研究 ―成果と課題

スライヤー・カリーモワ

ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所副所長

はじめに

まずは、ウズベキスタンにおける東洋学という学問の形成について簡単に述べておこう。一九一八年、タシケントにトルキスタン東洋学大学が創立された。この大学の創設がそもそもの理由によっていたかはさておくとして、その開学は国の学術活動における重要な出来事であった。その初代の学長には民族誌学者のアンドレーエフ (M. S. Andreev) が選任された。これについて学長職を務めたのは、著名なイスラーム学者、シュミット (A. E. Shmidt) であった。

トルキスタン東洋学大学においては、トルキスタンとこれに隣接する国境外の東洋諸国の歴史、文化、対外経済関係、および一連の東洋諸民族の言語が学ばれた。この間のさまざまな時期に、東洋の諸言語を完璧に習得したクズネツォフ (P. E. Kuznetsov)、ヴンツェッテリ (N. E. Vuntsel'）、マリツキー (N. G. Malitski)、バルトリド (V. V.

Barol'd)、上述のシュミットといった歴史学、民族誌学、文献学を専門とするロシア人学者、ならびに、サイイドラスール・サイイドアズィゾフ (Sayidrasul Sayidazizov) やイスラーム学に通じたクチャルバエフ (V. Qucharboyev)、およびアブドゥッラフマーン・サアディー (Abdurahmon Sa'diy)、ミールザー・タギーエフ (Mirza Tagiyev)、ミールザー・イブラーヒーム (Mirza Ibrohim)、バダル・カーリーエフ (Badal Qoriyev) といった現地人学者、さらに、上述のアンドレーエフ、そしてセミノフ (A. A. Semenov) といった現地在住のロシア人東洋学者が、この大学においてさまざまなテーマのもとで研究報告をおこない、また個別の研究活動に実践的に取り組んだ。

理由は定かではないが、一九二四年にトルキスタン東洋学大学は単独の学部として中央アジア国立大学に編入されることになる。一九三〇年になると、この学部は教育学部に改組され、さらに翌三一年には農芸大学に改編されたうえでドゥシャンベ市に移転された。現地の東洋学者たちは当局の

監視のもとに置かれることになった。しかし、その後の短期間のうちに、この学府からはイヴァノフ (P. P. Ivanov)、マッソーン (M. E. Masson)、シーシュキン (V. A. Shishkin)、スーハレフ (O. A. Sukhareva) といった学者、また、ムフタール・アウエゾフ (Muxtor Avezov)、ミールザーカラーン・イスマーイーリー (Mirzaxon Ismoiliy)、ベクスド・シャイフザダ (Magsud Shayxzoda)、シェヴェルディン (M. I. Sheverdin) といった作家が輩出した。

この時期には、教育の分野のみならず、写本作品を収集し、これに解題を付してカタログ化するといった方面でも作業が開始された。ウズベキスタン国立国民図書館の東洋セクションにおけるこの種の作業を促進するために、タシケント、サマルカンド、ブハラ、および共和国内のその他の諸都市から、写本を読む能力を十分に身につけた、かつてマドラサで教育を受けた人々が招集されるようになった。

一九四〇年代には、ウズベキスタン東洋学のその後の発展を基礎づける布石が置か

れた。すなわち一九四三年一月、ウズベキスタン科学アカデミーの構成下に東洋学研究所が創立され（当初これは東洋写本研究所と呼ばれた）、一九四四年には中央アジア国立大学に東洋学部が開設された。

これらの研究・教育機関においては、当時第二次世界大戦の戦火を避けるかたちでレーニンградやモスクワにおける東洋学研究の中心機関からタシケントに疎開してきたベルテリス（E. E. Bertel's）、バラーンニコフ（A. P. Barannikov）、ペリヤーエフ（V. I. Beliaev）、ペトルシエーフスキー（I. P. Petrushevskii）、ストルーヴェ（V. V. Struve）、コーノフ（A. N. Kononov）といった名だたる学者たちが活動を展開した。中央アジア国立大学東洋学部の学事には、東洋の諸言語や文学に精通したミールザーエフ（S. Mirzayev）、バハーディロフ（M. Bahodirov）、ガニーエフ（S. G'aniyev）、ハリドフ（B. Xolidov）、ムタリボフ（A. Mutalibov）、アンドレーエフ（M. R. Andreev）、また上述のセミョーノフといった現地の学者や専門家が招集された。

東洋学部の主要な課題が東洋学者、文献学者、歴史学者の養成であったとすれば、科学アカデミー東洋学研究所の活動は、写本作品を保存し、研究することからなっていた。というのも、東洋学研究所はウズベキスタン国立国民図書館（現在のアリーシール・ナヴァーイー名称国立図書館）の東洋セクションを基礎として創設され、そこに所蔵されていたすべての写本と石版本は東洋学研究所に移管されていたからであ

る。このとき以来、研究所は共和国の東洋学研究の中心拠点となった。当初、この研究所における学問研究の主要な分野は東洋文献学であった。写本に学術的な解題を付し、カタログ編纂をおこなうこと、また、写本作品を翻訳し、これに学術的な注釈を加えることは、この分野における基本的な課題として認識されていた。

かくして一九五〇年代以降、東洋学にかかわる研究活動は、大別すれば以下の四つの方向性にしたがって展開していくことになった。

- 一 カタログの編纂
- 二 史料の出版
- 三 中央アジア史の研究
- 四 国外の東洋諸国の歴史と現在に関する諸問題の研究

この四ついずれの項目に関しておこなわれた研究も、多かれ少なかれ時代の要請からの影響をこうむっていた。とりわけソ連時代には、人文社会系の他の学問分野と同様に、東洋学研究もまたイデオロギーの介入を受け、そこでは階級論的アプローチが要求された。こうした理由から、中世の諸史料の宗教的なアスペクトはほとんど顧みられることはなかった。よしんば顧みられたとしても、そのような宗教的アスペクトについては無神論的立場から解釈が試みられるといったケースがまみれたのである。宗教的な活動家やスーフィー・タリーカの活動も否定的に評価された。ソ連国外の

東洋諸国の情勢に関する研究は政治的な利益に立脚し、これらの国々においてさまざまな時代に起こった反乱や民族解放運動、または文化的な動向を対象とする研究に限られていた。

この時代に特徴的だったもう一つの状況は、共和国内の写本フォンド、アルヒーフ、図書館などが外国人研究者に対して閉ざされていたということである。ちょうどこれとおなじように、ウズベキスタン人研究者の側も外国に自由に出ていく機会をもっていなかった。つまり、ソ連国内外を結ぶような活発な学術交流は存在しなかった。しかし、そのような条件下においても、一九五〇年代から九〇年代にかけての時期に一連の基礎的な研究が実施された。

一九九一年にウズベキスタンの独立が宣言されたのち、国内の状況は急激に変化した。ウズベク語に国家語の地位が与えられるとともに、宗教的な信仰の自由と、歴史的遺産の見直しの可能性が生まれたのである。このことはまず、東洋学の分野における研究に反映した。すなわち、ウズベク語での学術出版、および大衆向けの出版が増加し、それと同時にロシア語での研究業績、とりわけロシア語で書かれた学位請求論文の数が激減した。研究におけるウズベク語の地位の確立は、研究成果の利用者の範囲をウズベキスタンという国家の領域によって限定することにつながったのである。独立以降、イスラーム学やスーフィズムのような研究の方向性が生まれたことは、ウズベキスタン東洋学にとって肯定的な状

況として評価することができる。イスラームに対する態度が変化した結果として、一九九九年にはタシュケント・イスラーム大学が、また、一九九八年にはイマーム・アルブハーリー学術研究センターが創設された。同センターは二〇〇八年、その活動の拡大を目的としてイマーム・アルブハーリー国際財団に改組されたうえで、タシュケントからサマルカンドに移転した。タシュケント国立大学（前身は中央アジア国立大学）の東洋学部を基礎として一九九一年に創立されたタシュケント国立東洋学大学、ならびに、ウズベキスタン共和国科学アカデミー・ビールニー名称東洋学研究所においては、イスラーム学の講座やセクションが開設された。しかし、イスラームとスーフイズムにかかわる諸々のテーマのもとで現在にいたるまでおこなわれてきた研究の学問的なレベルについて、これを一様に高いと言うことはできない。これには宗教的活動家やスーフイー・シャイフの生誕年と関連する数多くの記念行事の開催も、ある意味では影響を及ぼしている。なぜなら、記念行事のための出版物は、短期間での課題遂行が必須であるところの、国が発した注文の所産であるため、その多くは大衆向けの著作物によって構成されることになるからである。

近年における好ましい変化の一つが、国際的な学術交流の拡大である。外国人研究者にとっては、ウズベキスタン国内の研究機関や写本フォンドへのアクセスが可能となった。それとともに、ウズベキスタン人

研究者もまた、世界中の東洋学の研究拠点や史料所蔵機関に赴いて研究をおこなう機会を利用するようになってきている。国際的な研究プロジェクトや学会も実施されている。

概して、ウズベキスタン東洋学において今日までおこなわれてきた研究は、時間の経過とともに、時代の要請に応じながら量的にも質的にも変化を遂げてきたが、それらすべてを小論で網羅することは到底できそうもない。中世の最初期から二〇世紀初頭までの中央アジアの歴史および文化史にかかわるさまざまな物質史料や文献史料に依拠して公刊された研究業績は、膨大な数にのぼる。それらのうち一九四〇年代から九〇年代にかけておこなわれた研究のいくつかについては、日本で刊行された *Asian Research Trends* 誌に発表されたムクミノワ女史の論文において論じられている (R. G. Mukminova, "Recent Uzbek Historical Studies on Thirteenth-Nineteenth Century Uzbekistan," *Asian Research Trends*, No. 6, 1996, pp. 107-126)。ここ数年のあいだに活字化された研究の数も少なくない。それゆえ、以下ではもっぱら写本のカタログ化および出版と関連するいくつかの業績についてのみ、簡単な情報を提供するにとどめたい。

一 カタログ編纂

この分野に関しては、出版されたカタログは以下のように五つのカテゴリーに分類することができるだろう。

一・一 ウズベキスタン科学アカデミー諸フォンドのカタログ

一九九八年まで、ウズベキスタン科学アカデミー所轄の写本フォンドは、ビールニー名称東洋学研究所とハミード・スライマノフ名称写本研究所以いう二つの研究所に所在していた。一九九八年九月に写本研究所在が廃止され、そのフォンドに収蔵される七、五八六点の写本と約五、〇〇〇点の石版本はビールニー名称東洋学研究所に移管された。現在これらの写本と石版本は、東洋学研究所のハミード・スライマノフ・フォンドを構成している。そこに収蔵される約一、〇〇〇点のウズベク語写本、および約九〇〇点のペルシア語写本については、その解題を含む二巻本のカタログが一九八八年から八九年にかけて刊行された (*Katalog fonda Instituta rukopisei, t. I-II, Tashkent, 1988-1989*)。これら二巻に収録された解題の基本的部分は文学にかかわる作品によって構成されている。また、一九九九年にはイランにおいてハミード・スライマノフ・フォンドの大部分の写本を収める簡約カタログ (リスト形式) がペルシア語で公刊された (*Fihristi namgu-yi nusakh-i khatti-yi makhan-i Hamid Sulayman-i Ansttu-yi sharqhinasi-yi Abu Rayhan-i Biruni (Uzbekistan), ba-kushish-i Sayid 'Ali Mujani, Qum, 1377 H.Sh.*)。ビールニー名称東洋学研究所には上記スライマノフ・フォンドのほか、一三、三一九点の写本を収める基盤フォンド、ならびに、五、一三七点の写本からなる二次

フォンドが存在し、また、約五、〇〇〇点の文書と三五、〇〇〇点以上の石版本やその他の刊本も所蔵されている。このうち基盤フォンドの写本七、五七四点の作品解題が収録されたロシア語のカタログ『東洋写本集成』（略称SVR「セーヴェーエル」）が、一九五二年から八七年にかけて公刊され、これは全一一巻を数えている（*Sobranie vostochnykh rukopisei Akademii nauk Uzbekskoi SSR*, t. I-XI, Tashkent, 1952-1987）。このSVRは構成上、全巻にわたってさまざまなテーマの写本作品を収めており、言語の点でも混成的なものとなっている。このカタログの編纂は当時の東洋学のいくつかの研究分野の発展にとっては重要であったが、一方で、こと写本研究に関しては、のちに研究上の経験が蓄積されることもない、SVRの刊行には不備があったこともまた明らかとなった。

とくに、学術的な解題を付すにあたっての写本の選定は、綿密に練り上げられた原則にしたがったものではなかった。よって、解題の記述はテーマの点でも、言語の点でも、また、写本の選択基準の点でも、一貫性を欠いたものとなった。ある作品の解題の記述にあたって、その作品を収めたすべての写本が集められたわけではなく、結果として、同一の作品がくりかえし解題を与えられ、その解題はカタログのそれぞれの巻に分散して収められることになった。いくつかの作品には誤ったアイデンティフィケーションがなされ、古文書学的な情報を提示するさいに誤謬が生じること

もあった。

一・二 テーマ別カタログ

今述べたような状況をふまえて、東洋学研究所においては一九八〇年代にテーマ別カタログの編纂が開始された。この作業の成果として、一九九八年から二〇〇〇年にかけて、歴史、自然科学、医学に関する写本をそれぞれ対象とした三つのテーマ別カタログが刊行された（*Sobranie vostochnykh rukopisei Akademii nauk Respubliki Uzbekistan: Istoriia*, Sostaviteli: D. Iu. Iusupova, R. P. Dzhaliyova, Tashkent, 1998; *Sobranie vostochnykh rukopisei Akademii nauk Respubliki Uzbekistan: Tochnye i estestvennye nauki*, Sostaviteli: A. B. Vi'danova, Tashkent, 1998; *Sobranie vostochnykh rukopisei Akademii nauk Respubliki Uzbekistan: Meditsina*, Sostaviteli: Kh. Khikmatullaev, S. U. Karimova, Tashkent, 2000）。その出版にあたってはドイツのハレ・ヴィッテンベルク両市にまたがるマルティン・ルター大学のユルゲン・パウエル（Jürgen Paul）教授から直接の支援をたまわった。

ウズベキスタンの独立以降もカタログ化の作業は継続し、これにあたってはテーマ別カタログの編纂に重点が置かれた。なぜなら、その主な目的は、たとえ単一テーマの枠内ではあれ、フォンドに所在する写本に関して、できるかぎり多くの新たな情報を研究利用に供することにあつたからである。こうした作業の成果として、ナクシユバンディーヤ・タリーカの歴史に関する作

品の写本カタログ（Sh. Z. Boboxonov, A. Mansur, *Naqshbandiyya tariqatiga oid qo'lyozmalar fihristi*, Toshkent, 1993）¹ 一八世紀から二〇世紀にかけて著されたスーフィズムに関する作品の写本カタログ（*Kratkii katalog sufistskikh proizvedenii XVIII-XX vv. iz sobraniia Instituta vostokovedeniia Akademii nauk Respubliki Uzbekistan in. al-Biruni*, Sostaviteli: S. Gulomov i dr., Redaksiionnaia kollegiia: B. Babadzhonov, A. Kremer, Iu. Paul', Berlin, 2000; *Katalog sufistskikh proizvedenii XVIII-XX vv. iz sobraniia Instituta vostokovedeniia in. Abu Raikhan al-Biruni Akademii nauk Respubliki Uzbekistan*, Sostaviteli: B. Babadzhonov i dr., Shtutgart, 2002）² アフンデ・ヤサヴィーの『わづる「コクメト」』ものの写本カタログ（*Öz Fä Shighistanu institutindaghi Qoja Akhmet Yasavi khikmeterining qoljazba katalogi*, Turkistan, 2006）³ 全三巻からなる東洋「ミニ」アチュールのカタログ（*Oriental Miniatures*, vol. I-III, Tashkent, 2001-2004）が公刊された。作品の言語についてもいくつかのカタログが編纂された。たとえば、アラビア語作品のカタログ（*Al-Muntaga min mukhtalat ma'had al-Biruni lil-dirasat al-sharqiyya bi-Tashkent*, Dubay, 1995）や、ペルシア語作品のカタログ（*Fihrist-i nusakh-i khatti-yi farsi-yi ganjina-i Anstittu-yi sharqshnasi-yi Abu Rayhan-i Biruni-yi Tashkent*, zir-i nazar-i 'A. Mujani, 'A. Urubayif, Sh. Musayif, Tihnan, 1376 H. Sh.; *Fihrist-i nusakh-i khatti-yi farsi-yi Anstittu-yi sharqshnasi-yi Abu Rayhan-i Biruni-yi*

Farhangistan-i ulum-i Uzbekistan, jild 1, zir-i nazar-i 'A. Mujani, 'A. Bahramiyan, 'A. Urumbayif, Sh. Musayif, Tihran, 1378 H.Sh.; *Fihrist-i nussha-ha-yi khatti-yi farsi-yi ganjina-i Ansttu-yi sharqshinasi-yi Abu Rayhan-i Biruni-yi Tashkand*, zir-i nazar-i 'A. Mujani, 'A. Urumbayif, Sh. Musayif, Tihran, 1381 H.Sh.)がすでに公刊されている。これらのカタログは東洋学研究所に所在し、かつ、その解題がすでにSVRの各巻に収められている写本を対象としており、アラビア語およびペルシア語の読者のために特別に編纂されたものである。したがって、これらのカタログは言語別とはいえ、全フォンドに所在する、当該言語の写本すべてを網羅しているわけではない。

ドイツの研究者との協力のもとで編纂され、ロシア語で出版された、一八世紀から二〇世紀にかけてのスーフィズムに関する作品のカタログは、これまで解題を与えられていなかった写本をカバーしている点で注目に値する。このカタログのいま一つの重要な点は、東洋学研究所の基盤フォンドのみならず二次フォンド所在の写本も含めたうえで、当該テーマに関連する作品に解題が与えられていることである。

一・三 著者別作品カタログ

SVR各巻の編纂・出版過程においては、アブドゥッラフマーン・ジャーニー (*Rukopisi proizvedenii Abdarrakhmana Dzhami v sobranii Instituta vostokovedeniia Akademii nauk Uzbekskoi SSR*, Sostaviteli: A.

Urumbayev i L. M. Epifanova, Tashkent, 1965) 'アリーシェール・ナヴァリー (Q. Munirov va A. Nosirov, *Alisher Navoiy asarlarining O'zSSR Fanlar akademiyasi Sharqshunoslik instituti to'plamidagi qo'lyozmalari*, Toshkent, 1970; Q. Munirov va M. Hakimov, *Alisher Navoiy "Xamsa"ining qo'lyozmalari katalogi*, Toshkent, 1986) 'アーミール・フスラウ・デフラーヴィー (Q. Munirov, *Amir Xusrav Dehlaviy qo'lyozma asarlari katalogi*, Toshkent, 1975) 'アブーナスル・ファラーラービー (A. L. Kazyberdov, *Sochineniia Abu Nasra al-Farabi v rukopisiakh Instituta vostokovedeniia AN UzSSR*, Tashkent, 1975) 'アブーアリー・イブン・スィーナー (B. Vakhbova, *Rukopisi proizvedenii Ibn Siny v sobranii Instituta vostokovedeniia AN UzSSR*, Tashkent, 1982) といった思想家や学者によつて著された、東洋学研究所のフォンドに所在する諸々の著作の写本のカタログも個別に公刊された。

一・四 民間およびその他のフォンドのカタログ

ウズベキスタンの諸州に所在する写本コレクションに関する情報は、シャフリサブズのラウナキー私立図書館の写本カタログ (*Fihrist-i nussha-ha-yi khatti-yi kitabhkhana-i Ravnaqi-yi Shah-i sabz (Uzbekistan)*, ba-kushish-i Sh. Vahiduf, A. Irkinaf, Qum, 1377 H.Sh.)、ブハラ州立図書館の写本カタログ (G. Kurbanov i F. Shvarts, *Katalog arabograficheskikh rukopisei Bukharskoi oblasti biblioteki im. Abu Ali ibn*

Siny, Bukhara, 1998) 'カラカルバク自治共和国スクスの写本カタログ (A. Muminov, M. Szuppe, A. Idrisov, Sh. Ziyodov, *Manuscripts en écriture arabe du Musée régional de Nikus (République autonome du Karakalpakstan, Ouzbékistan): Fonds arabe, persan, turki et karakalpak*, Rome, 2007) などに見いだすことが出来る。

しかし、ウズベキスタン共和国における最大のフォンドである東洋学研究所の写本フォンドに、今日にいたるまで依然、包括的な学術的解題が与えられていないことはあらためて指摘しておかねばならない。この問題がある程度解決するために、これまでもカタログ化の対象となってきた基盤フォンドの写本群に包括的に解題を与え、その電子カタログを英語で作成するという作業がこのほど開始された。このプロジェクトは五カ年での達成がめざされており、ドイツのゲルダ・ヘンケル財団 (Gerda Henkel Stiftung) の助成金によつて実施されている。このカタログ編纂にあたっては、これまで生きてきたような不備が繰り返されないよう、十分な注意が払われている。

一・五 文書カタログ

現在のところ、文書はウズベキスタン共和国において公刊されてきた文献史料の蓄積のなかでも比較的薄い層を形成している。その一方で、こうした文書に含まれるオリジナルの情報は、中央アジアの中世史や近代史における社会、経済、宗教、その他の諸問題の研究において大きな意義を有

している。このような観点からみるならば、共和国内のさまざまなフォンドや博物館に所蔵されている歴史文書のカタログは、この地域の歴史におけるいまだ開かれざる生面を検討するうえできわめて重要であろう。ビールーニー名称東洋学研究所のフォンドに収蔵される一九世紀から二〇世紀にかけてのヒヴァのカーズイー文書のカタログ (*Katalog khivinskih kazitskikh dokumentov XIX-nachala XX vv.*, Sostaviteli: A. Urunbaev, T. Khorikava, T. Faiziev, G. Dzhuraeva, K. Isogai, Tashkent-Kioto, 2001)⁷ 中央アジアのヤルリク (勅令) のカタログ (*Katalog sredneaziatskikh zhalovannykh glamoi iz fonda Instituta vostokovedeniia im. Abu Rakhana Beruni Akademii nauk Respubliki Uzbekistan*, Sostaviteli: A. Urunbaev, G. Dzhuraeva, S. Gulomov, Halle (Saale), 2007)⁸ ホラズムのイチヤンカラ特別保護区博物館に所蔵される一七世紀から二〇世紀にかけてのヒヴァのカーズイー文書とヤルリクのカタログ (E. Karimov, *Regesty kazitskikh dokumentov i khanskikh iartlykov Khivinskogo khanstva XVII-nachala XX v.*, Pod nauchnoi redaktsiei E. V. Rtveldze, Tashkent, 2007)⁹ また、一七世紀から一九世紀にかけてのクブラヴィーヤ・タリーカ

のワクフ文書 (E. Karimov, *Kubraviiskii vakf XVII-XIX vv.: pis'mennoe isochiniki po istorii sufijskogo bratstva Kubraviia v Srednei Azii*, Tashkent, 2008) など¹⁰、そうした文書カ

タログの実例である。

一九世紀から二〇世紀のヒヴァのカー

ズイー文書のカタログの公刊にあたって、日本人研究者のなした貢献には多大なものがある。彼らはウズベキスタンのヒヴァ市でおこなった研究調査にさいして件の文書群を民間から買い取り、東洋学研究所に寄贈するとともに、同研究所の文書研究の専門家であるウルンバエフ、ジョラエワ、ファイズイーエフの諸氏と共同しておよそ一、七〇〇点の文書に解題を付し、これをカタログ化してロシア語で公刊した。今現在もこれら日本人の共同研究者の諸氏は当該文書のファクシミリ版を包括的なたちで出版すべく、作業に取り組んでいる。

前述の中央アジアのヤルリクのカタログもまた、東洋学研究所の国際共同研究所の所産である。そこには一五世紀から二〇世紀初頭までの時期に属する一二二点の文書が収められており、それらはブハラ、ヒヴァ、コーカンドのいわゆる三ハン国にかかわるものである。このカタログには一二二点すべての文書の写真複製も添えられている。この出版はドイツとウズベキスタンの東洋学者の、古文書学の分野における継続的な共同研究の成果である。

古文書学に関しておこなわれる研究にとって、文書に捺された印章の研究も重要である。この点で、『中央アジア印章学に関する諸資料』と題されたカタログ (G. Kurbanov, *Materialy po sredneaziatskoi sfragistike: Bukhara. XIX-nachalo XX vv.*, Tashkent, 2006) は、当該分野の専門家にとって有用であろう。このカタログは二部構成をとっており、第一部ではブハラ国立

建築・芸術保護区博物館に所蔵される、一九世紀から二〇世紀初頭の時期に属する印章についての個別的なデータ (補遺に印形も示されている) が提示され、つづく第二部では印章の捺されている個々の文書の基本的データが与えられている。

二 史料の出版

ウズベキスタンにおいて現在まで出版されてきた史料は、便宜的に以下の四つに分類することができよう。

- 一 歴史史料
- 二 科学史に関する史料
- 三 イスラームとスーフイズムに関する史料
- 四 言語と文学に関する史料

こうした出版物に共通しているのは、それらが基本的にロシア語もしくはウズベク語の訳注のかたちで公刊されてきたことである。それとともに、たとえば、もしテュルク語のものであれば、アラビア文字からキリル文字への転写のかたちにとられることもままあり、また、ごくまれにはあるが、もとのアラビア文字のままに刊行されるというケースもみられる。

二・一 歴史史料

これまでに刊行された諸々の歴史著作は、年代的には中央アジアにおけるイスラームの浸透期、ティムールおよびティ

ムール朝、また、シャイバーン朝とアシュタルハーン朝の時代に属している。その大部分を構成するのは翻訳である。そのなかでも、中央アジアとその近隣の東洋諸国の

九世紀から一世紀までの時期に光を当てる著作としては、アブーバクル・ナルシャヒーの『フハラ史』(Abu Bakr Muhammad ibn Ja'far Nashaxiy, *Buxoro tarixi*, Fors-tojik tilidan tarjima A. Rasulevnik, Toshkent, 1966)・アブージャアファル・アッタバリーの『タバリー史』(*Istoriia at-Tabari*, Perevod s arabskogo V. I. Beliaeva, Toshkent, 1987)・アブーサイード・ガルデイー

ズイーの『ザイヌルアフバール』(Abu Sa'id Gardizi, *Zain al-akhbar: Ukrashenie izvestii (Razdel ob istorii Khorasana)*, Perevod s persidskogo A. K. Arends, Vvedenie, kommentari i ukazateli L. M. Epifanovi, Toshkent, 1991)・アブルファズル・バイハキーの『イスラーム史』(Abu-l-Fazl Baihaki, *Istoriia Mas'uda: 1030-1041*, Perevod s persidskogo, vvedenie, kommentari i prilozhenia A. K. Arends, Moskva, 1969)・またこのほかにも、先行する時代にくわえてモンゴル時代(一二三一年にかけて起こった出来事まで)をも記述対象に収めたイッズッディーン・イブヌルアスィール・アルジャザリーの『アルカーミル・フィタアアリーフ』(Ibn al-Asir, *Al-Kamil fi-t-ta'rikh: Polnyi svod istorii*, Perevod s arabskogo iazyka, primechania i kommentari P. G. Bulgakova; dopolnenia k perevodu, primechaniam i kommentariam, vvedenie i

ukazateli Sh. S. Kamolidina, Toshkent, 2006)などを挙げることができる。

アミール・ティムールおよびティムール朝の時代の史料に関しては、ソ連時代にもウズベキスタンの独立後にも、中央アジア史のほかの時代に比して、より多くの研究が積み重ねられてきた。しかし、一九九〇年代にいたるまで活字化されてきた研究においては、ティムールやティムール朝の政治的活動、また個々の人物(とりわけティムールやバーブルなど)を扱うさいにはイデオロジカルなアプローチがとられていた。

そうとはいえ、ソ連時代にはペルシア語およびテュルク語の史料のうち、アブドゥッラッザーク・サマルカンデイーの『ペトライ・サアダイン・ヴァ・マジムマイ・バフライン』(Abdurazzoq Samarqandiy, *Matlul sa'dayn va majmal bahrayn*, Fors-tojik tilidan tarjima, kirish so'z va izohli lug'alar A. O'rinboevnik, Toshkent, 1969)・ファスミーフ・ハヴァーフィーの『インシマリ・ファスレーン』(Fasikh Akhmad ibn Dzhahal ad-Din Mukhammad al-Khavafi, *Mudzhmal-i Fasikhi (Fasikhov svod)*, Perevod, predislovie, primechania i ukazateli D. Iu. Iusupovi, Toshkent, 1980)・バーブルの『バーブル・ナー』(*Babur-nama: zapiski Babura*, Perevod: M. Sale, Toshkent, 1958)・グルバタンベギムの『フエートン・ナー』(Gulbadan begim, *Humoyunoma*, Fors tilidan tarjima: S. Azimjonova, Toshkent, 1959)とよくなった著作が公刊された。これらとならんで、ウルンバエフ氏の編纂にかかると、シヤラフッ

ディーン・アリー・ヤズデイーの『シャファール・ナーマ』のファクシミリ出版(Sharaf-ad-din 'Ali Iazdi, *Zafar-name*, Podgotovka k pechatu, predislovie, primechania i ukazateli A. Urumbaeva, Toshkent, 1972)・および『ナヴァーイー・アルバム』として有名な書簡集に収められた『ジャーミリーの書簡集』の出版(*Pis'ma-avtografy Abdarrakhmana Dzhami iz "Al'boma Navoi"*, Vvedenie, perevod, primechania i ukazateli A. Urumbaeva, Toshkent, 1982)などの種の基礎的研究の成果のうちに数えられる。

中央アジア史の一六世紀から一八世紀にわたっての諸事件に関して情報を提供する史料としては、シャイバーン朝の歴史に関するファズルッラー・イブン・ルーズビハーンの『フブーアンナーマ・イ・ブハラー』(Fazlallakh ibn Ruzbikhan Istakhani, *Mikman-name-i Bukhara (Zapiski bukharskogo gosita)*, Perevod, predislovie i primechania, R. P. Dzhaliyovoi, Pod redaktsiei A. K. Arends, Moskva, 1976)・ハーフズ・タリント・ブハリーの『アブジュンブー・ナー』(Hofiz Tanish ibn Mir Muhammad Buxoriy, *Abdullanoma (Sharafnomayi shohiy)*, Forschadan S. Mirzayev tarjimasi, I-II jildlar, Toshkent, 1966-1969)・また、アシムタルハーン朝の歴史を取り扱うムハンマド・コースフの『マキーム・ハーン史』(Mukhammed Iusuf munshi, *Mukim-khanskaia istoriia*, Perevod s tadjhiskogo, predislovie, primechania i ukazateli A. A. Semenova, Toshkent, 1956)・年代的にその続編とみ

れるミール・ムハンマド・アミーン・ブ
ハリーリーの『ウバイドウッラー・ナーブ』
(Mir Mukhammad Amin-i Bukhari, *Ubadulla-
name*, Perevod s tadjhiskogo s primechaniami
A. A. Semenova, Tashkent, 1957)、『そしつ
アブドゥッラフマーン・タリーイの『アブ
ルファイズ・ハン史』(Abdurakman-i Tali',
Istoriia Abulfeiz-khana, Perevod s tadjhiskogo,
predislovie, primechania i ukazatel' A. A.
Semenova, Tashkent, 1959)といった著作の
翻訳が公刊された。

ウズベキスタンの独立後には過去に関す
る解釈のあり方に変化が生じた。支配者た
ちの歴史的な役割にはそれまでとは異なる
評価が与えられるようになり、そのことは
東洋学に関する研究にも反映した。とりわ
け、アミール・ティムールやティムール朝
の王族、また、彼らと関係のあった宗教的
活動家や政治家を対象とした翻訳出版が増
加した。イブン・アラブシャールの『アミ
ール・ティムールの歴史』(Ibn Arabshoh,
Ajoib al-maqdur fi tarixi Taymur (*Temur
tarixida taqdir ujoyibolari*), So'z boshi, arab
tilidan tarjima va izohlarini U. Uvatov
tayyorlagan, Toshkent, 1992)、『ミールザー・ム
ハンバド・ハイドルの『タリーヒ・ラシーディー』
(Mirza Muhammad Khaidar, *Ta'rikh-i Rashidi*,
Vvedenie, perevod s persiskogo A. Urumbayeva,
R. P. Dzhaliyovoi, L. M. Epifanovoi, Tashkent,
1996)、『シャラフッディーン・アリー・ヤズ
ディーの『ザファル・ナーブ』(Sharafuddin Ali
Yazdiy, *Zafaroma*, So'z boshi, tabdil, izohlar
va ko'rsatkichlar mualliflari: A. Ahmad, H.

Bobobekov, Toshkent, 1997; Sharaf ad-Din Ali
Iazdi, *Zafar-name*, Predislovie, perevod so
starouzbekskogo, kommentarii, ukazateli i
karta A. Akhmedova, Tashkent, 2008)、『ニザー
ムッディーン・シャリーリーの『ザファル・
ナーブ』(Nizomiddin Shoniy, *Zafaroma*, [Fors
tilidan tarjima va izohlar muallifi: A.
O'rinboyev], Toshkent, 1996)、『アブドゥッ
ラッザーク・サマルカンディーの『マトラ
イ・サアダイン・ヴァ・マジュマイ・バフライ
ン』(Abdurazzoq Samargandiy, *Matlai va dayn
va majmai bahrayn*, Fors tilidan tarjima va
izohlar muallifi: A. O'rinboyev, I-II jildlar,
Toshkent, 2008)といった著作は、そうした
成果の実例であろう。

当該の時代にかかわる史料出版のなか
で、ホージャ・ウバイドウッラー・アフ
ラールとその信奉者たちの往復書簡が原史
料の英訳を付されて刊行されたこと(*The
Letters of Khwaja 'Ubayd Allah Ahwar and His
Associates*, Persian text edited by A. Urumbayev;
English translation with notes by J. Gross;
Introductory essays by J. Gross and A.
Urumbayev, Leiden/Boston/Köln, 2002)は特筆
に値する。この刊本は『マジュムーアイ・
ムラーサラート』(通称『ナヴァーイー・
アルバム』)と呼ばれる書簡集に収められ
ている原書簡を収録しており、ホージャ・
アフラールの筆に帰される一二八点の書
簡、さらにその信奉者たちの一二三点の書
簡がそこには含まれている。この刊本の重
要性は、それがマー・ワラー・アンナフル
とホラーサーンにおけるティムール朝後期

の歴史に光を当てる作品であるという点の
みならず、ナクシユバンディーヤ・タリー
カヤ、その卓越した指導者であるホー
ジャ・アフラールという人物とその活動を
研究するうえでも信頼性の高い史料である
という点にある。

これまでに積み重ねられてきた研究業績
とならんで、この分野においてはこれから
遂行していくべき一連の諸課題も存在して
いる。とくに指摘するとすれば、文献史
料、わけでも歴史史料を原テキストのかた
ちで出版することには、現在にいたるまで
十分な関心が払われていない。じつさい、
それら歴史史料の大多数は依然として未公
刊のままである。とりわけ、中央アジア史
の一六世紀から二〇世紀初頭までの時代に
光を当てる諸史料に関しては、先行する時
代に比しても研究が不足している。この不
足を補い満たす目的で、現在、ビールー
ニー名称東洋学研究所では当該の時代にか
かわるいくつかのペルシア語およびテュル
ク語の著作について、そのテキストと翻訳
を刊行するための準備が進められていると
ころである。

二・二 科学史に関する史料

ソヴィエト政権の時代には、ウズベキス
タン東洋学において実施された基礎的研究
の大部分は中世の碩学たちの世俗的な業
績、より正確にいえば、精密科学や自然科
学の分野における著作のロシア語およびウ
ズベク語への翻訳がこれを構成している。
その理由は、一つにはホラスミール、ファル

ガーニー、ビールニー、イブン・スィナー、ウルグベクのような学者たちが中央アジア地域の出身であり、なおかつ彼らの著作がその故郷、すなわち中央アジア本土においてほとんど研究されていなかったことにあった。またもう一つの理由は、まさにこの方法に訴えることにより、地域に古来存在してきた豊かな文化遺産を、共産主義イデオロギーの支配する時代にいながらにして階級論的アプローチからは自由な方たちで提示することになった。じつところ、一九五〇年代以降、ビールニーの著作集の叢書がロシア語訳 (*Aburekhan Biruni. Izbrannye proizvedeniia*, t. I-VII, Tashkent, 1957-1987) とウズベク語訳 (*Abu Rayhon Beruni. Tanlangan asarlar*, I-III, V, VI jildlar, Toshkent, 1965-2006) とで刊行されてきたし、イブン・スィナーの名高い医学百科事典『医学典範』はそのロシア語 (*Abu Ali ibn Sina, Kanon vrachebnoi nauki*, kn. 1-5, Tashkent, 1954-1960; 2-e izd: kn. 1-5, Tashkent, 1980-1982) とウズベク語 (*Abu Ali ibn Sino, Tib qonunlari*, 1-5 jildlar, Toshkent, 1954-1961; qayta nashr: 1-5 jildlar, Toshkent, 1979-1983) の完訳がそれぞれ二度刊行されている。また、ラーズビー (*Abu Bakr Roziy va uning shogirdi yozib qoldigan kasalliklar tarixi*, Kirish, tarjima, izoh va ko'rsatkichlar H. Hikmatulloyevniki, Toshkent, 1974) フォーレーダー (*A. L. Kaziberdov i S. A. Mutalibov, Abu Nasr al-Farabi. Issledovaniia i perevody*, Tashkent, 1986) フォールガーニー (*Ahmad al-Farg'omy. Astronomiya*

ilmi asoslari, Tarjimon: A. Abdurahmonov, Toshkent, 1998; *Ahmad al-Fargani. Astronomicheskie traktaty*, Perevod s arabskogo, vvodnaia stat'iia i kommentarii B. A. Rozenfel'da, I. G. Dobrovolskogo, N. D. Sergeevoi, pri uchastii P. G. Bulgakova, Tashkent, 1998) フォラズビー (*Muhammad ibn Muso al-Khorazmi. Tanlangan asarlar: Matematika, astronomiya, geografiya*, Toshkent, 1983; *Muhammad ibn Muso al-Khorezmi. Astronomicheskie traktaty*, Vstupitel'naia stat'iia, perevod i kommentarii A. Akhmedova, Tashkent, 1983; *Muhammad ibn Muso al-Khorezmi. Matematicheskie traktaty*, Oretstvennyi redaktor: S. Kh. Sirodzhiddinov, Tashkent, 1983) の学問的遺産のなかからいくつかのアンソロジーが編まれ、ロシア語とウズベク語によって刊行された。そして、これらの出版物にもとづいて、科学史に関する一連の論文と著作が執筆された。こうした出版物があったからこそ、東洋学研究所はウズベキスタンにおける科学史研究の中心拠点となったのである。

独立以降、科学史に関して出版された史料はそれほど多くはない。その大部分はまた、碩学たちを顕彰する記念行事と関連して出版された。とくに一九九四年には、ウルグベクの生誕六〇〇周年を記念して、彼の『ズイジ・ジャデーデー・グーラカーニー』という天文学著作のロシア語訳注 (*Ulugbek Muhammad Taragai, "Zidh": Noye Guraganov astronomicheskie tablitsy, Vstupitel'naia stat'iia, perevod, kommentarii i*

ukazateli A. A. Akhmedova, Tashkent, 1994) が刊行され、またアフマド・フォールガーニー (七九七年頃生) の生誕二二〇〇周年が祝われたさいには、その天文学著作のロシア語訳とウズベク語訳が刊行された (前掲)。二〇〇六年には地理学、天文学、占星術の諸問題を扱ったビールニーの著作『アッタフビーム』のウズベク語訳が公開された (*Abu Rayhon Beruni. Tanlangan asarlar*, VI jild. *Tajhim*, Toshkent-Urganch-Xiva, 2006)。さらに、ニールザー・ウルグベクの師であったカーズイーザーダ・ルーニーが、チャグニーニーの天文学論集に付した注釈のロシア語訳 (*Kazi-Zade Rumi. Kommentarii na "Kompendii astronomii" Chagmini*, Predislovie, perevod s arabskogo iazyka i primечaniia P. G. Bulgakova, Tashkent, 1993) が公開されたほか、バースイト・ハーン・シャーシー・タビープが著した医学書のキリル文字転写版 (*Bosixon ibn Zohidxon Shoshiy. Qonuni Bositiy yoki Qonun al-mabsut*, Tabdii, izoh va lug'atlar muallifi: Mahmud Hasanov, 1-2 jildlar, Toshkent, 2003) も出版された。

これまでに公開されてきた科学史に関する研究を総括するならば、そこには次の二点の特徴を見ることができるところ。第一に、出版された史料の多くは、中央アジアにおける科学の九世紀から一七世紀までの時代、また、一五〜一六世紀の時代の業績にかかわるものであり、一七世紀から二〇世紀までの時代はほとんどカバーされていない。第二に、テーマとしては、相対

的にみて、数学、天文学、医学が大きな比重を占めている。

科学史といえは、精密科学や自然科学の歴史と理解されるのはもっともなことではあるが、哲学があらゆる学問の「母」とされるのを考慮に入れるならば、次の点を指摘することができる。すなわち、中世のあらゆる学問は哲学によって基礎づけられていたといえども、この時代の哲学に関する史料は、ウズベキスタンではまだごくわずかしかな研究されていない。その理由は、中世の哲学がイスラーム教と結びついていたため、ソ連時代には哲学に関する史料を唯物論的解釈なしに公刊することが不可能であったことに求めることができる。

今日、こうした空隙を埋めることを目的として、東洋学研究所ではイブン・スィナーの神学と哲学に関する諸著作の、新たなアプローチにもとづく研究が着手されるようになった。

しかし現在、科学史に関する史料の研究は低落傾向にあり、それはいくつかの要因と結びついている。すなわち今日では、こうした研究を実行できるような専門家（東洋諸語を身につけた、科学の分野の専門家）の数がきわめて少なくなっているのである。独立後に歴史的・宗教的内容の著作を自由に研究することが可能となったおかげで、学問的関心がより多くはこの方面に向けられていることが、そのような低落を導いた主な原因なのかもしれない。

二・三 イスラームとスーフィズムに関する史料

ウズベキスタン東洋学において、イスラーム教とスーフィズムに関する諸史料の研究と出版は、独立後になってから本格的にはじまった。イスラームの研究への制約が取り払われたことは、一方ではクルアーン、宗教諸語、スーフィー・タリカの歴史、およびその教義に関する諸々のテーマの研究を可能にしたが、しかしまた一方で、学術性からはほど遠い出版物をも増大させることになった。これはある意味では、宗教文献に対する一般庶民の関心の高さにも起因していた。その結果、現在イスラームにかかわるテーマのもとで出版されている書籍のなかで、大衆向けの著作の比重は学術的・基礎的な出版物のそれに比してはるかに大きなものとなっている。とはいえ、基礎的な研究としては、東洋学研究所においておこなわれたクルアーンのウズベク語による学術的な訳注 (*Qur'oni karim, Tarjima va ilmiy-tarixiy izohlar*: M. Usmonov, I kitob, Toshkent, 2004) ならびに、スーフィズムに関するいくつかの研究を挙げることができ。そうした研究の一環として、『マナーキビ・ドゥークチ・イーシャーン』と題されたテュルク語作品の原文とロシア語訳注が、専門的な解説を付されたうえで二〇〇四年に公刊された

(*Manakib-i Dukchi Ishan (Anonim zhititi Dukchi Ishana—predvoditelia Andizhanskogo vostaniia 1898 goda), Vvedenie, perevod i kommentarii*: B. M. Babadzhanov, Izdatel': A. fon Kingel'gen, Tashkent-Bern-Almaty, 2004)。この出版はカザフスタンおよびイスの研究者との共同研究によって実現したものであり、この刊本においては一九八八年のアンディジャンにおけるドゥークチ・イーシャーンの反乱の歴史を解明するため、にビールニー名称東洋学研究所所蔵の諸写本がはじめて取り上げられ、かつ、ドゥークチ・イーシャーンのスーフィー教団の形成とそのロシア植民地当局に対する闘争の歴史が幅広く眺望されている。その解説においては、蜂起の主要要因は宗教的なものではなく、むしろ経済的なものであったようだ」と結論づけられている。

シャイフ・フダーイダードの『ブスターヌルムヒッピン』という著作についても、東洋学研究所所蔵の二点の写本にもとづいてその校訂テキストが出版された (*Shaykh Khudaydad bin Tash Muhammad al-Bukhari, Bustan al-muhibbin*, Ed. B. M. Babajanov, M. T. Qadirova, Turkistan, 2006)。ヤサヴィーヤ・タリカの歴史と教義について書き記されるこの著作において、著者はいくつかの儀式、それに関連する特殊な用語、タリカの代表的人物たちの精神的・肉体的状態、ズイクルの形式と種類について考察を加えながら、それらを理論的に説明している。また同書においては、この地域のテュルク語話者のあいだでスーフィズムの影響下で生まれたいくつかの典型的な民族芸能について、その精神的な重要性が示されている。

ナクシユバンディーヤというスー

フイー・タリーカの秀でた指導者であるマフドゥーミ・アアザム（一六世紀）の筆に帰される『リサーライ・タンビーフッサラティーーン』という著作については、そのロシア語訳が、サンクトペテルブルグで刊行された『スーフイーの英知』と題された論集において発表されている（“Makhdum-i A'zam, *Risala-i tanbih al-salatin*,” *Perevod i kommentarii*: B. M. Babadzhanov, *Mudrost' suf'iev*, Sankt-Peterburg, 2001, str. 373-428）。この著作はシャイバーン朝君主のウバイドゥッラー・ハンに献呈されたものであるが、その執筆目的は為政者に対して、国政においてシャリーアの諸規定を厳格に遵守するように呼びかけることにあった。著者の理論的な見地や見解はホージャ・アフラルの経験に拠って立っていた。

ホージャ・アフラル（一四〇四―九〇年）という人物とその活動への関心は、ウズベキスタンの独立後に高まりをみせた。それを如実に反映する例として、このテーマに関連する、多くの場合は大衆向けの大小の出版物が世に現れるようになった。学術的出版物の実例としては、前段でも言及したウルンバエフ氏他編『ホージャ・アフラルとその信奉者たちの書簡集』、また、シャイフの生涯とその子孫の歴史を扱ったカーディロワ女史による『ホージャ・アフラルの伝記』と題される専論（M. Kadyrova, *Zhitiia Khodzha Akhrara: Opyt sistemnogo analiza po rekonstruktsii biografii Khodzha Akhrara i istorii roda Akhriaridov*,

Tashkent, 2007）⁷、さらに、ファフルッディン・アリー・サフイー（一四六三―一五〇三年）によって著された『ラシャハーティ・アイヌルハヤート』という作品の、十九世紀の古ウズベク語訳のキリル文字転写版（Faxriddin Ali Safiy, *Rashahot (Obi hayot tomchilari)*, Noshirlar: M. Hasaniy, B. Umzozgov, Toshkent, 2003）などを挙げる）とが⁸である。

近年、一九世紀末から二〇世紀にかけて中央アジア地域において生じた政治的変動の状況下におけるイスラームのあり方や、現地の知識人やウラマーが植民地時代とソヴィエト体制下において展開した改革主義的な活動に光を当てる史料もまた学術的に取り扱われるようになった。

とりわけ、コーカンド出身の詩人にしてカーズイーであったムハンマド・ユヌスホージャ・ターイブ（一八三〇―一九〇三年）の『トゥフファイ・ターイブ』という著作のペルシア語テキスト（Mukhammad Yunus Khvadzha b. Muhammad Amin-Khvadzha (Ta'ib), *Tukhfa-i Ta'ib*, Podgotovka k izdaniyu i predislovie: B. M. Babadzhanov, Sh. Kh. Vakhidov, Kh. Komatsu, IAS Project Central Asian Research Series, No. 6, Tashkent-Tokio, 2002）⁹、また啓蒙家にして詩人であったイスハークハーントラ・イブラト（一八六二―一九三七年）のウズベク語による『時代の秤』と題される著作（Iskhak-khan tura ibn Dzhunaidallakh Khvadzha, *Mizan az-zaman*, IAS Project Central Asian Research Series, No. 2,

Tashkent-Tokio, 2001）¹⁰、ソ連時代の最初期と末期の中央アジアに出現した信仰厚いウラマーたちの手になる著作の原文とロシア語訳を収めた論集（B. M. Babadzhanov, A. K. Muminov, A. fon Kiugel'gen, *Disputy musul'manskikh religioznykh avtoritetov v Tsentral'noi Azii v XX veke*, Almaty, 2007）など）¹¹、そのような史料の好例といえよう。今述べた出版物のうち前者二つは、日本のイスラーム地域研究プロジェクトによって刊行されたものである。

二・四 言語と文学に関する史料

この方面における出版物の占める比重はそれほど大きくない。九〇年代にいたるまで、東洋の言語と文学に関して公刊されてきた研究業績は、次の二つのグループ、すなわち、中世古典文学の諸史料と現代東洋文学にかかわる出版物とに大別することができる。中世東洋文学に関して論じようとするならば、ウズベク古典詩人の創作物も視野に収める必要がある。もともと、これはきわめて大きなテーマであり、別途論じるべき問題といえる。よって、ここではもっぱら東洋学と関連するいくつかの出版物についてのみ述べることにしたい。

公刊された史料のなかでは、数の点でいえばテュルク語史料が第一の地位を占めており、ペルシア語史料、さらにアラビア語史料がこれにつづく。アラビア語史料の古典文学の例としては、一一世紀の文人、アブー・マンスール・アッサーリービーの『ヤティー・ムトゥッダフル』¹²、および、『タティ

ンマトゥルヤティーム』という著作のウズベク語訳 (Abu Mansur as-Sa'olbiy, *Yatimat ad-dahr*, Taddiq qiluvchi, tarjimon, izoh va ko'rsatkichlarni tuzuvchi: I. Abdullayev, Toshkent, 1976; Abu Mansur Abdumalik ibn Muhammad as-Sa'olbiy, *Tatimmat al-yatima*, Taddiq qiluvchi, tarjimon, izoh va ko'rsatkichlarni tuzuvchi: I. Abdullayev, Toshkent, 1990) また、アブーアリー・イブン・スィーナーの筆に帰される『サラマンとイブサール』と呼ばれる哲学的な説話 (A. Irsay, *Abu Ali ibn Sining "Salomon va Ibsol qissasi"*, Toshkent, 1973) など、『医学におけるラジャズ体韻文 (ティッビー・ウルジューズ)』と題される韻文作品 (Sh. Shoislomov, *Ibn Sining tib haqidagi she'riy asari ("Urjuza")*, Toshkent, 1972) などを挙げる) などがみえる。

一九六〇年代には、マフムード・カーシュガリーの『テュルク諸語集成』という著作のウズベク語訳が三巻本で公刊された (Mahmud Koshg'ariy, *Devonu lug'otit turk*, 1-3 jildlar, Tarjimon va nashrga tayyorlovchi: S. Mutalibov, Toshkent, 1960-1963)。この刊本は、これまでにさまざまな言語でおこなわれてきたこの著作の翻訳出版のなかでも、とりわけ注目に値するものとみなされている。このほか、アラビア語説話である『千夜一夜物語』のウズベク語訳も全八巻本で刊行されている (*Ming bir kecha*, 1-8 jildlar, Toshkent, 1959-1963)。

ペルシア語史料の出版は、基本的には古典詩人 (ウマル・ハイヤーム、アリーシー

ル・ナヴァーイー、アブドゥッラフマール・ジャミーリー、ジャラールッディーン・ルーミーなど) の創作物のアンソロジーの翻訳がこれを構成している。テュルク語の諸史料は、他にもまして多くのウズベク文献学者によって研究対象とされている (たとえば: Alisher Navoiy, *Ilk devon*, Nashrga tayyorlovchi: Hamid Sulaymon, Toshkent, 1968; Boborahim Mashrab, *Mabdati nur*, Taddiq qiluvchi, eski o'zbek yozuvidan nashrga tayyorlovchi, lug'at va izohlarni tuzuvchi: Hoji Ismatulloh Abdulloh, Toshkent, 1994; Yusuf Xos Hojib, *Qutadg'u bilig (Saodatga yo'llovchi bilim)*, Nashrga tayyorlovchi: Qayum Karimov, Toshkent, 1971; Zahiriddin Muhammad Bobir, *Muxtasar*, Nashrga tayyorlovchi: Saidbek Hasan, Toshkent, 1971)。

ウズベキスタンの独立後の出版物のなかで、マフムード・アッザマフシャリー (一〇七五―一四四年) の『ムカッディマトゥルアダブ』という辞典のファクシミリ出版は注目に値する。タシュケントのアリーシール・ナヴァーイー名称国立文学博物館に所蔵されるこの著作の唯一写本は、日本学術振興会の出版助成によって二〇〇八年に東京で公刊されている (*The Muqaddimat al-Adab: A Facsimile Reproduction of the Quadrilingual Manuscript (Arabic, Persian, Chagatay and Mongol)*, Tokyo, 2008)。この著作は四言語 (アラビア語、ペルシア語、テュルク語、モンゴル語) の辞典であり、単語は名詞と動詞に分類されている。テキストの出版にあたって

は、モンゴル語語彙のラテン文字転写と索引が別冊のかたちで刊行されている (*The Mongolian Words in the Muqaddimat al-Adab: Romanized Text and Word Index*, Tokyo, 2008)。この出版が文献学者、言語学者、東洋学者に裨益することは疑いない。

おなじく独立後には、ウズベク語で著されたタズキラのさきがけである、アリーシール・ナヴァーイーの『マジャリース・ナファアリース』という作品がナヴァーイーの著作の二〇巻本のシリーズ (*Alisher Navoiy: Mukammal asarlar to'plami*, 20 jildlik, Toshkent, 1987-2007) のなかで復刻されている (Alisher Navoiy: *Mukammal asarlar to'plami*, 13 jild. Majolis un-nafois, Nashrga tayyorlovchi: S. G'aniyeva, Toshkent, 1997)。ウズベク語で著されたもう一つのタズキラとしては、二〇世紀の編者であるプラトジャーニン・ダームツラー・カイユーモフの『タズキライ・カイユーミー』という作品が三巻本で一九九八年に刊行された (Po'lajon Domulla Qayyumov, *Tazkira-yi Qayumiy*, Nashrga tayyorlovchi: Aziz Qayumov, Toshkent, 1-3 kitoblar, 1998)。この作品の特徴は、中世から二〇世紀にかけての時代に生き、創作をおこなったウズベク文学のあまたの担い手たちについて、その生涯や創作に関する情報をまとめて収載している点にある。そこにはとりわけ一八―一九世紀の文壇に関しての新たな知見を含む情報が数多く含まれている。

文献学のとくに文学にかかわる分野の研究を活性化するために、ビールニー名称

東洋学研究所ではアラビア語とペルシア語の文学史料の研究に重点が置かれつつある。目下、中央アジア史のさまざまな時代に編まれたペルシア語のタズキラを研究する取り組みも緒に就いたところである。

以上に述べてきたような大きな紙幅をもつ出版物とならんで、東洋学のさまざまなテーマに関する、分量的にはより規模の小さい個別の論文も、それぞれの出版物のなかで恒常的に発表されている。そうした出版物としては、たとえば、一九九〇年以来、継続的に刊行されてきたビールニ

名称東洋学研究所の『東洋学 Shurgshunoslik』と題される研究論集、タシケント国立東洋大学の刊行になる、おなじく『東洋学 Shurgshunoslik』と題される雑誌と『シャルク・マシユアル Shargh mash'ali』と題される研究論集、イマーム・アルブハーリー研究センターの『イマーム・アルブハーリーの教訓 Imom al-Buxoriy saboqlari』と題される雑誌、さらには、タシケント・イスラーム大学の『タシケント・イスラーム大学紀要 Toshkent islom universiteti axboroti』(TJU axboroti)などを挙げるつとがである。

日本語訳・木村暁(日本学術振興会特別研究員/財団法人東洋文庫)

【訳者附記】

ここに訳出したのは、二〇〇八年一二月九日に東京大学本郷キャンパス(法文一号館一三番教室)でおこなわれたスライヤー・カリーモワ(Surayyo Ubaydullayeva Karimova)博士のウズベク語による特別講演(題目: O'zbekistonda islom davri yozma manbalarining o'rganilishi: natijalar va vazifalar)の全文である。この特別講演会は、NIHUプログラム・イスラーム地域研究東京大学拠点と財団法人東洋文庫の共催で実施された。

講演者のカリーモワ博士(一九五五年タシケント生)は、中世中央アジア自然科学史を専門とする気鋭の研究者である。父親はウズベキスタン共和国の科学アカデミー会員に叙され、イブン・スィーナーの『医学典範』のロシア語・ウズベク語訳でも有名な故ウバイドゥッラー・カリーモフ(Ubaydulla Isroilovich Karimov)博士であり、カリーモワ女史もその衣鉢を継いで、とくに化学史と医学史の分野ですぐれた業績を上げている(主著: S. U. Karimova, IX-XI asrlarda kimyo va dorishunoslik fanlari taragqiyotida Markaziy Osiyo olimlarining o'rni, Toshkent, 2002)。イブン・スィーナーのホラズムにおける学究活動を扱った共著による小さな論稿もあり、これには邦訳がある(B. アブドゥハリモフ、S. カリーモワ(木村暁訳)「ホラズムにおけるイブン・スィーナー」『日本中央アジア学会報』三、二〇〇七年、四一―四四頁)。

なお、東洋学研究所とそこでの比較的最

近の研究状況については、以下の文献も参照されたい。久保一之「ウズベキスタンにおける中央アジア史研究の現状」『西南アジア研究』三九、一九九三年、五〇―六一頁・木村暁「ウズベキスタン科学アカデミー東洋学研究所の現在」『日本中央アジア学会報』二、二〇〇六年、二六―三〇頁・スールヤグデイ・タシエフ(木村暁訳)「ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所所蔵コレクション…イスラーム文化の諸問題の研究におけるその意義」『日本中央アジア学会報』六、二〇一〇年三月刊行予定。